

普段学べないことを学びました。

T高等専門学校：情報電子工学科・4年

期間：令和4年8月22日～26日（5日間）

私は今回のインターンシップでケーブルテレビの編成制作部にお邪魔しました。まず、1日目に市内の中学校の卓球部に取材をする番組の撮影をしました。そこで、撮影器具の使い方や設置の仕方、マイクの取り付け方などを学びました。カメラひとつの設置でもたくさんの作業があり、覚えることがたくさんあって大変でしたが、初めて大きいカメラに触ってとてもワクワクして楽しかったです。続いて2日目には幼稚園の取材をした後に、バスとタクシーの撮影をしました。1日目は、インターンシップで一緒になった方と2人で1つのカメラの設置をしましたが、この日は制作部の方に教えていただきながら1人でカメラの設置をしました。1日目に教えていただいたことがうまく出来ないところもありましたが、1日目よりもスムーズに設置することが出来ました。また、番組制作では撮影者の様子などをうかがいながら撮影を進めました。相手が自分の気持ちを言葉にしなくても、顔の表情や動作などで状態を察して相手がリラックスできるように誘導することが大切だなと思いました。3日目に市役所で防災についての撮影を行い、その後に街頭インタビューをし、午後に撮影したビデオの編集作業をしました。2日目から3日目にかけてたくさん撮影器具の撮影準備をしたので、この2日間で撮影器具の設置を1人で出来るようになりました。街頭インタビューでは商店街で歩いているひとに声をかけて防災の取材をしました。取材の依頼をするのはすごく勇気が必要だったので断られたときは少しショックでしたが、取材交渉を承諾されたときはすごく嬉しく、やりがいを感じました。また、取材をするときにカメラを初めて肩の上に乗せて撮影をしました。カメラはすごく重くてバランスもとりにくく大変でした。撮影には、体力や筋肉、バランスも必要になってくるんだなと思いました。午後には、午前中に撮影した市役所での防災の撮影の編集作業をしました。編集作業では主に映像のカットやペースト、音量調節、違う映像の音と画面を同じ画面で流したりしました。観ている人が聞きやすいように、見やすいように作業をしていくのはとても難しかったです。この編集作業で、映像をつくるという仕事は観る人のためにしている仕事なんだなと改めて感じました。4日目の梨生産組合の取材では自分たちで映像の撮影をしました。以前までは撮影器具の準備だけをして、撮影は制作部の方々がしていましたが、この日に初めて自分で撮影をしました。撮影の対象物はぶどうや梨だったので、どうすれば美味しそうに見えるのかを考えながら撮影をしました。撮影には光の当たり方や、空間をどう使うかなどたくさんの技術があり、上手くは撮影できませんでしたが、すごく楽しかったです。5日目では、ニュース番組の公開撮影に同行し、間近でニュース番組の撮影に立ち会うことができ、とてもドキドキしました。そこでわたしの役割は公開撮影を観覧しに来てくださった方々が最後に質問などを投げかけるときのマイクを持っていくことでした。ニュース番組を現場の皆さんと一緒に撮影出来てとても楽しかったです。8月22日～8月26日の5日間で、5日とは思えないほど充実した実習をしました。5日間で学んだことをこれからの生活に役立てていきたいです。

「相手に伝わるということ」

YK大学：国際文化学部・文化創造学科・2年

期間：令和4年8月29日～9月2日（5日間）

私は今回、広告会社の営業のインターンシップに参加させていただいた。このインターンシップの中で最も印象に残り、学びとなったことは、「相手に伝わる」という考えだ。相手に伝えることは容易にできるが、必ずしも伝えた情報が相手に伝わっているとは言えない。そのため、伝えると伝わるは、全く異なる表現であることを学んだ。「相手に伝わる」という考えは、クライアントの相談や、提案の際に営業にとっては欠かせないものだ。しかしながら、デザイナーも同様に「相手に伝わる」という考えが必要だということも、デザイナーの方に話を伺ったり、製作された広告やホームページを拝見したりすることを通して実感した。「相手に伝わる」仕事をしていくために必要な要点が3つあると私は経験を通して考えた。

1つ目は、事前準備である。事前準備とは、参考資料やクライアントの情報、提案材料をクライアントに会う前に頭に入れることだ。提案をより納得してもらうためには、相手の現状と提案の根拠が必須だと、営業同行の中で感じたからだ。

2つ目は、相手の動線を考えることである。相手の動線とは、まずどのような企業をターゲットにし、その企業がどのような目的で何をしたいのかを明確にするということだ。これを行うことで、企業に対し効果的なアプローチができ、情報の伝わりやすさが向上すると学んだ。

3つ目は、改善していく姿勢である。常にどう改善したらよいかを営業内でも、クライアントの方とも話し合う姿を5日間の中で幾度となく目にした。さらに、その改善しようという心意気が、クライアントの心を強く動かしているように私は感じた。だからこそ、改善しようとする姿勢が最終的には相手に伝わることに繋がると考えた。これらの3つが揃って「相手に伝わる」ということが可能になると考えた。そして今後の私自身の課題として、3つの要素を意識して、授業におけるプレゼンテーションや作品制作を心掛けていきたいと考えた。

また、私はインターンシップ前後では、営業に対する考えや印象が大きく変化した。インターンシップ以前では、営業は商品をアピールして、企業に買ってもらうことが仕事だと考えていた。しかし、インターンシップを経験して、営業とは、クライアントの課題を解決するために、自社が出来ることをクライアントに提案していく仕事でもある、と学び、営業が魅力的に感じた。この変化は、私にとって仕事に対する視野の狭さを気付かせてくれるものだったと言える。一度体験してみることで、向き不向きや、仕事の意外な一面を知ることができる。このことを改めて実感できた瞬間でもあった。インターンシップを通して、自分の未熟な部分や、強み、仕事に対する考えの変化など多くの学びを得た、充実した5日間であった。これからの成長のために、この経験を活かし、授業や就職活動に励んでいきたい。

まちの情報と想いを発信する

T大学：経済学部・現代経済学科・3年

期間：令和2年9月8日～11日（4日間）

私は将来、地元の魅力を発信する仕事に就きたいと考えています。なぜならば地元の魅力を発信することで、地域活性化に貢献したいからです。発信するといっても行政や観光など様々な職業がありますが、今回は地域に密着しているケーブルテレビの制作部のインターンシップに応募することにしました。

インターンシップに参加する前は、ケーブルテレビとは、地域のテレビ番組を制作する会社という漠然とした知識でしたが、四日間の研修をさせて頂いたおかげで業務内容をしっかりと知ることができました。その中でも意外だと感じたのは、ケーブルテレビは放送局でありながらケーブルの契約を取る必要があるため、番組を作る制作部だけでなく営業部や技術部があり、業務内容が多岐に渡っていることです。

また、研修中に度々感じたことは、社員の方々の正しい情報を届けようとする強い想いです。番組に出演されている方の意図を正しく視聴者に伝えられるように、現場での打ち合わせや取材での確認、原稿や編集の仕方、放送前の確認などが常に入念に行われていました。

また、特に印象的だったのは表題にもある通り、何事にもまちの情報と想いを発信することをもって行動されていたことです。入念な打ち合わせや細やかな確認をすることが正しい発信につながりますが、それらに加えて、まちの人々とのつながりを大切にされているのを感じました。例えば、取材先では、挨拶と撮影をさせていただけることに対する感謝の気持ちを仰っていました。そうすることで取材を受けてくださる方との関係がスムーズになり、結果的により良い情報を引き出せることに繋がっていると捉えました。このような対応を心掛けることで、まちの人とのつながりを深くし、まちの情報や想いを発信できるだけでなく、市民皆で作るまちづくりにつながっていくのではと感じました。

また、カメラなどの重い機材を運んだり、時には長時間に及ぶロケがあったりなど、ケーブルテレビの制作部は体力的にも大変な仕事です。しかし、仕事をされている皆さんはそんな大変さを感じさせず、精力的に仕事をされていました。やはりここでも発信する側の社員の皆さん自身に誇りとやりがいを感じました。ケーブルテレビは、まちの皆さんに寄り添ってまちのために発信しているという自覚を持たれていることが良い発信ができていることに繋がっていると思いました。

今回四日間と短い期間ではありましたが、非常に貴重な体験をすることができました。冒頭にも記述しましたが、“地元の魅力を発信する”まさにケーブルテレビは、それを担っているのだと改めて感じることができました。今回体験したことを、今後の学生生活さらに社会人になった時にしっかりと生かしたいと思います。

最後になりますが、研修に参加するにあたって、ご多用中にも関わらずご指導していただいた皆様には感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。

放送業界への魅力が増した5日間

K大学：経済学部・経済学科・3年

期間：令和元年9月2日～6日（5日間）

私はこのインターンシップ研修に参加したことで、ケーブルテレビ局の仕事の流れを理解しました。研修前はテレビ業界に興味はありましたが、その仕事内容については無知の状態でした。そのような状況でこれから就職活動を行うことに不安を感じていたため、今回の研修はとても貴重な体験になりました。

5日間の研修では取材に同行して、その様子を見学したり、実際にカメラなどの機材に触れ、撮影を行ったりしました。撮影時には映したいものに対してカメラの位置や角度を変えると、映したいものの見方がかわったり、光の当て方によってきれいな映像を撮ることができたりしました。私たちが普段見ているテレビの映像は、こうした工夫によって視聴者の心を動かしているのかと思うと、興味がさらにわきました。また、インターンシップ研修中の姿を、研修生によって撮影し合い、その撮影した映像を編集し、ニュースで流す一本の映像を作成しました。作成過程のなかで、読む側が見やすく、そして読みやすい原稿の作成方法や、作成した原稿に沿った映像の編集方法を学び、一つの映像を作る流れを理解しました。撮影の時にはたくさんの角度から撮影を行いましたが、実際にできた原稿は短く、それに合わせて撮影した映像も編集して短くするため、実際に使用した映像はとても短くなりました。1時間程度かけて撮影したものは、放送時には1分から2分に凝縮して伝えなければならないため、どの映像が視聴者に伝わりやすいかを厳選することに難しさを感じました。

このインターンシップ研修を通して、研修前よりもテレビ業界における仕事内容について理解が深まりました。私のケーブルテレビ局に対するイメージでは、カメラマンやアナウンサーなどが専門の仕事を持ち、それぞれが仕事を分担しながら映像を作成しているのかと思っていました。しかし、実際には民放テレビ局のように、アナウンサーやカメラマンなどのような専門の仕事のみを行う人はいないため、一人ひとりが取材や撮影、映像の編集作業、原稿作成を行い、なかにはそれに加えてアナウンサーを行い、一人ひとりがたくさんの仕事をこなして、映像作成を行っていました。

なので、ケーブルテレビ局では放送する映像を収録するまでの過程に多く携わることができ、私はそこに魅力を感じました。また、私が研修前に想像していた以上に、ケーブルテレビ局は地元住民にとって、地域の情報を知る手段として愛されていました。番組のロケに同行した時には、地域住民から「いつも見てるよ」などの声かけがよくあり、私は5日間のみ研修でしたが、不思議とうれしい気持ちになりました。

このインターンシップ研修を通して、ケーブルテレビ局で働くことに対して、とても魅力的に感じるようになりました。そして、コミュニケーションの大切さを改めて実感しました。このインターンシップでは、放送制作部の方々から就職活動に向けてのアドバイスや、社会に出る前に大学生活中に行うべきことなどたくさんのお話を聞くことができました。これからも、社会で働いている人などとコミュニケーションをとり、自分自身を高めていこうと思います。

笑顔の裏にある努力

K S 大学大学院：国際環境工学研究科・1年

期間：平成30年9月4日～10日（5日間）

私は将来就きたい仕事を考えたとき、すぐに浮かんできたものがあります。それは人々を「笑顔」にする仕事です。日常生活で人が笑顔になる場面を想像すると、最初に、笑いながらテレビを観ている姿が浮かんできました。近年は一家に一台テレビがある時代であり、テレビから流れる映像や音を通して、子供からお年寄りまでみんなが情報を得たり、笑顔になることが出来ます。このように、人々を笑顔にするテレビから流れてくる映像や音がどのように作り出されているのか実際に自分の目で見てみたいと思い、今回、株式会社Iのインターンシップに参加させていただきました。

初日は番組制作の見学を行いました。子供からお年寄りまでわかる言葉の取捨選択、映像の編集、テロップのデザインや位置など本当に細かい部分まで気を配っており、「視聴者にとってわかりやすく、また観たいと思ってもらえる番組を作る」という一つの目標に向かって、制作課の方々全員が一生懸命取り組んでいました。また、一人が取材、撮影、映像編集、原稿作成まで一連の業務を行っており、時には午前中に取材してきたニュースをその日の夕方に放送することもあるということを知り、仕事の質に加えスピードも必要であることを学びました。

二日目以降は取材への同行や、テロップの作成、キャスター体験を実際に行いました。取材では現場の雰囲気や人の真剣な表情や楽しそうな表情をカメラで撮影したり、インタビューを行いました。撮影では重たいカメラをもって走り回り、インタビューでは話し手の気持ちを引き出せるような質問をするなど様々な努力がなされていることを実際に感じる事が出来ました。テロップ作成では必要最小限の情報を視聴者にわかりやすく、なおかつ映像の邪魔にならないよう、デザインや位置を工夫しながら作成しました。またキャスター体験では、キャスターさんの緊張感はもちろん、キャスターさんと制作課の方々との連携プレーの重要性を身をもって感じる事が出来ました。

インターンシップに参加する前までは正直、今回体験した情報・通信業は、現在大学院で行っている研究とはあまり共通点はないと思っていました。しかし、今回のインターンシップを通して、研究との共通点を二点発見しました。一点目は自分の情報に自信をもつことです。大学の研究においてエビデンスが必要であるように、番組で使用する言葉一つ一つにも根拠が必要であり、私たちが普段気にしない細かい部分までしっかり調べたうえで、自身をもって情報を発信しておられました。二点目は努力を怠らないことです。地道に日々実験をして結果を出す研究と同様に、番組制作でも印象に残る映像編集、原稿作成などを他の番組を観ながら学んだりしており、私たちの笑顔の裏には制作課の方々の努力があることを実感しました。

5日間という短い期間でしたが、大学の研究では学ぶことのできない貴重な体験をすることが出来ました。この経験を今後に関し、人々を「笑顔」にするために努力できるような人間になりたいと思います。

目的意識をもって

K大学：国際文化学部・国際文化学科・2年

期間：平成29年8月22日～26日（5日間）

大学2年になっても未だに働くということに実感が持てずにいた私は、仕事についてより深く考える機会にしたいと思い、今回インターンシップ体験をすることにしました。高校3年間で伝えることの難しさと楽しさを放送部にて学んだため、放送を仕事としているところであれば、それが仕事になるとどう変わるのか・学生生活と社会人の違いは何かを学べるのではないかと思います。ラジオ局のインターンシップに参加しました。

それまでは、「伝える」ということは、調べる・まとめる・発信する・考えてもらうことだと学んでおり、私自身もそう考えてきました。しかし、伝えることを仕事としている方々を見ていて分かったことは、そこには「動いてもらう」ことも含まれるべきであるということでした。人に何かの情報を届ける際には、ただ一方的に面白い・楽しい話をするよりも、それを聞いて何かをしようと思わせることが重要であるようでした。実際にコミュニティFMはその地域に密着した情報を届けており、ラジオの生放送を通して防府のまちを元気にすることを目的に活動されていました。

ラジオ放送を通して、企業・店・団体とそれらの客（リスナー）の間に入ることで二者を近づけ、町に動きが生まれます。そしてそれは、町を元気にすることにつながります。そういったお話を聞く中で、また実際に生放送で防府の話がされているのを見る中で、社員やパーソナリティの方々がいかにご自身の仕事に誇りをもっているのかが伝わりました。コミュニティFMの役割を理解し、そこに誇りを抱いているからこそ、パーソナリティの方々は、リスナーに防府のまちなかを動いてもらうように楽しい話をしているのだと感じました。仕事をする上で重要なのは、知識や技術を持っていることよりも、その役割を理解した上で動くことができるか、という点なのかもしれないと考えるようになりました。

また、社会人の方々に囲まれて気づいたことは、私自身の対人能力・コミュニケーション能力の低さです。これに関して特に痛感した点は、どこまで挨拶・自己紹介をするべきなのかがわからないということです。例えば、社員の方の説明を受けている間に、初めてお会いする社長が会社に戻られた場合、説明を中断して行われる挨拶のなかでどれだけ自己紹介をしていいのかわからなくなってしまい、ほとんどできなかったということがありました。他にもゲストが来られた際、私は、他のパーソナリティの方々に合わせて「こんにちは」や「お疲れ様でした」しか挨拶しませんでした。社員さんはゲストの方に私のことを「K大学から職場体験に来ている〇〇さんです」と紹介してくださいました。考えてみれば小さな放送局に何度か訪れる人であれば、初めて会う社員はあまりいないでしょうから、私のことを疑問に思うはずですし、そこまでの自己紹介を自分からすべきであったと反省することが何度かありました。

現時点での自分と社会人の間にあるギャップが、今回のインターンシップを通して見えてきました。これからの学生生活の中で、少しでもこの差を埋められるように目的意識をもって活動していきたいと思っています。